様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20530335
研究課題名（和文）企業事故発生のメカニズム
ー企業社会責任（CSR）の経営学的実証研究ー
研究課題名（英文）The mechanisms of Corporate Accidents

研究代表者
谷口　勇仁（TANIGUCHI EUGENE）
北海道大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：60313970

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，「企業事故発生のメカニズム」を，従来の先行研究の批判的検討と，日本企業を対象とする定性的調査にもとづき，理論的・実証的に解明することである．その際，従来の事故研究に関する知見を踏まえ，具体的な手続きのダイナミクス，すなわち「手続きの神話化」に注目して，事故発生のメカニズムの分析を試みた．

まず，従来の先行研究の批判的検討に関しては，社会科学分野の代表的な企業事故の先行研究である①ヒューマンエラー研究，②集団思考研究，③リスクマネジメント研究，④高信頼性組織研究，⑤企業倫理研究，⑥技術的逸脱の標準化について整理・検討を行った．また，手続きの神話化に関しては，殺菌神話に焦点を当て，①神話の生成，②神話の維持，③神話の崩壊（事故），③’神話の解体というダイナミクスを想定し，各プロセスについて検討を行った．

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the mechanisms of corporate accidents. We conducted a critical review of previous research in the field and gathered qualitative surveys on subject corporations. In order to determine these mechanisms, we investigated real corporate accidents and focused on the local procedures followed prior to the accident by those involved.

The paramount findings in Social Science research were reviewed. Specifically, Human Error Studies, Groupthink Research, Risk Management Research, High Reliability Organizational(HRO) Studies, Business Ethics Research, Research on Normalization of Deviance. Furthermore, we examined procedures surrounding three main factors for myth establishment: (1)myth production and sustainment, (2)myth dissolution(accident/ incident), (3)myth dismantlement.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：経営学・経営学
キーワード：企業社会責任（CSR），企業事故，リスクマネジメント

１．研究開始当初の背景

近年の企業の大規模化，技術の高度化により，企業が引き起こす事故の影響はますます大規模化している．さらに，戦後に建設された設備の老朽化，団塊世代の大量退職による技能の空洞化などによって，企業事故の件数も今後ますます増大することが予想されている．企業事故の多発は，当該企業の信頼を失うのみならず，ひいては企業を中心とした現代資本主義社会の根本的な危機につながる可能性を持つ．そのため，効果的な企業事故防止策を提示することは喫緊の課題であるといえよう．

研究代表者は，2000 年に雪印乳業が引き起こした集団食中毒事件に関して，ヒアリング調査を基にした詳細な事例分析を行った．その分析を基に，集団食中毒事件のあらたな事故原因の解釈体系を提示した．この研究によって，「手続きの神話化（特定の手続きがどのような状況においても絶対的に通用すると信じられるようになること）」が企業事故を引き起こす可能性が指摘された．

２．研究の目的

本研究の目的は，「企業事故発生のメカニズム」を，従来の先行研究の批判的検討と，日本企業を対象とする定性的調査にもとづき，理論的・実証的に解明することである．

本研究は，こうした企業事故のメカニズムを実証的に解明し，効果的な事故防止の提示に貢献する理論構築を目指す．具体的には，企業事故を引き起こした根本的な手続きに注目し，その手続きが事故を引き起こしたメカニズムについて分析を行う．この際，注目すべき有効な概念が「手続きの神話化」である．企業事故の多くは，どのような状況においても絶対的に通用すると思われている手続きが，想定外の状況において手続きの目的が果たせず，結果的に事故を引き起こすというメカニズムが想定できる．雪印の食中毒事件を例にあげれば，「殺菌という手続きを踏めば食中毒は必ず防げる」といういわゆる「殺菌神話」が社内において形成されたために，殺菌では防ぐことのできない毒素による食中毒が引き起こされたのである．

３．研究の方法

研究の方法は，文献調査とヒアリング調査を採用した．

文献調査に関しては，主に社会科学分野の企業事故の先行研究に関して網羅的なサーベイを行い，以下の 6 分野（①ヒューマンエラー研究，②集団思考研究，③リスクマネジメント研究，④高信頼性組織研究，⑤企業倫理研究，⑥技術的逸脱の標準化）について先行研究の批判的検討を行った．

ヒアリング調査に関しては予算と時間の制約を考慮し，パイロットスタディとして企業事故に関する調査を行った．その調査にもとづき，手続きの神話化が事故を引き起こす可能性について検討した．

４．研究成果

まず，文献調査に関しては，①ヒューマンエラー研究，②集団思考研究，③リスクマネジメント研究，④高信頼性組織研究，⑤企業倫理研究，⑥技術的逸脱の標準化の分野における先行研究の批判的検討を行った．検討の結果，以下の３点が明らかになった．

第 1 に，従来の先行研究には，組織に注目した先行研究（③，④，⑤）と現場に注目した先行研究（①，②，⑥）に分類できることである．第 2 に，組織⇒現場⇒作業という因果連鎖を想定していることである．組織を表す変数である組織文化や制度が存在し，その組織文化や制度が，事故が発生した現場に影

響を与える．事故が発生した現場には，集団や個人が存在し，その集団や個人が作業を行う．そして，その作業が事故を引き起こす．従来の先行研究では，このようなマクロからミクロへの連鎖を想定している．第 3 に，従来の先行研究は，回顧的アプローチ（レトロスペクティブアプローチ）を採用し，事故を引き起こしたことを前提に，企業事故という現象を回顧的に分析している．そのため，ハインドサイトバイアス（発生結果の知識がその結果の発生に対する予知能力を過大評価させること）が発生している可能性がある．つまり,「本来あってはならない要因があったに違いない」，もしくは,「必ずこの事故は防げたはずだ」という，発生原因は事前に容易に発見できたという前提に基づき，その問題点を探索することになる．

これらの先行研究の整理と検討について，高信頼性組織研究，ヒューマンエラー研究に関しては，論文としてまとめている（谷口，2008，谷口，2009a）．また，先行研究全体に関わる課題についての検討については，第 31 回日本生産管理学会全国大会（北海道大学）において報告を行っている．

次に，ヒアリング調査に関しては，パイロットスタディとして，殺菌神話以外の神話を探索したが，事故に直結する新たな神話を探すことはできなかった．これは，①大きな事故をヒアリングすることがそもそも困難であること，②小さな事故であれば当該現場に直接関係している人でない限り，事故の原因を正確に描写できないことによると考えられる．

そのため，主に雪印乳業集団食中毒事件から導出された殺菌神話に注目し，2 次資料を中心に分析を行い，その殺菌神話のダイナミクスについて検討を行った．なお，その際，雪印乳業集団食中毒事件の先行研究における分析を整理したものを論文としてまとめている（谷口，2009c）．また，検討を行う際に，①神話の生成・維持，②神話の崩壊，③神話の解体というダイナミクスを想定し，各プロセスについて検討を行った．

まず，①の神話の生成・維持に関しては，手続きの信頼性が高まることと，手続きが必要とする条件の暗黙化が促進要因として明らかとなった．②の神話の崩壊に関しては，外部環境の変化と組織内部の変化によってもたらされることが明らかとなった．③の神話の解体については，回顧的アプローチに基づくシミュレーションと，わかりやすい手続きの構築・維持が重要であることが明らかになった．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①小山嚴也・谷口勇仁（2010）「企業におけるソーシャルイシューの認識－雪印はなぜ 2 回目の不祥事を防げなかったのか－」日本経営学会誌, Vol. 26, pp. 15－26.（2010 年 10 月）査読有.

②谷口勇仁（2009a）「雪印乳業集団食中毒事件に関する事例研究の整理と検討」『経済学研究』(北海道大学)　Vol. 59, No. 3, pp. 179-187. 査読無.

③谷口勇仁（2009b）「イノベーションと企業不祥事　―企業活動の光と影―」日本経営学会編『日本企業のイノベーション(経営学論集第 79 集)』千倉書房, pp. 119-131. 査読無.

④谷口勇仁（2009c）「企業事故研究におけるヒューマンエラー研究の構図と課題」『経済学研究』（北海道大学）Vol. 58, No. 4, pp. 261-270. 査読無.

⑤谷口勇仁（2008）「高信頼性組織(HRO)研究に内在するジレンマ」,『経済学研

究』（北海道大学）　Vol.58, No.2, pp.61-70.査読無.

〔学会発表〕（計１件）

①谷口勇仁「企業事故研究の構図と課題」第 31 回日本生産管理学会全国大会，北海道大学（札幌），2009 年 3 月 14 日.

６．研究組織

(1)研究代表者

谷口　勇仁（TANIGUCHI EUGENE）
北海道大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：60313970

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし